

# 平成二十九年 入学試験問題

## 国語

### 第二回

【注 意】

- ・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・問題は一ページから六ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「人は一人では生きていけない」

皆さんは先生やご両親から、よくこうした言葉を聞かされたことはありませんか。テレビドラマなどでもこんなセリフをよく耳にします。「たしかにそうだな、人間一人では生きていけないな」とこの言葉に素直に納得する人もいるかもしれませんが。でも反対に「ホントにそうかな。なんかしつくりこないな。人はじつは一人でだって十分生きていけるんじゃないかな」と思う人だっているでしょう。

皆さんはどう思われるでしょうか。

この問いに関する答えの傾向としては、こんな予想が立てられます。年齢が上になればなるほど、そして暮らしている場所が地方であればあるほど、「人は一人では生きていられない」と答える可能性が高い。そして若い年代でも都会暮らしであればあるほど、「アングライ人間は一人で生きていけるのではないか」と答える割合が多いのではないかと。A 都会暮らしの若者すべてが「一人でも生きていられる」と考えるわけではないでしょう。しかし全体的にはこうした傾向が見られるのではないかと思われ

ます。人と人との（つながり）の問題を考える最初の出発点として、人は本当に一人では生きられないのか、それとも、まあそれなりに生きていけるのかといった問いを立ててみましょう。

かつての日本には「ムラ社会」という言葉がよく表現されるような地域共同体が存在していました。「ご近所の人の顔と名前はぜんぶわかる」といった（1）シユウラクがそれですね。これは、何も地方の農村や漁村だけに限ったことではなく、東京のような都会にだってあったのです。『ALWAYS 三丁目の夕日』——映画ですから描き方にはフィクションの要素も多分に入っているとはいえ——のように、近所に住む住人同士の関係が非常に濃密な

「ご町内」が、昭和四〇年くらいまでの日本には確かにありました。そんな「ムラ社会」がカッコとして存在した昔であれば、これは明らかに「一人では生きていけない」ということは厳然とした事実でした。

なにより、食料や衣類をはじめ、生活に必要な物資を調達するためにも、仕事に就くにしても、いろいろな人たちの手を借りなければいけなかったからです。こうした、物理的に一人では生活できない時代は長く続きまし

た。だから村の交際から締め出されてしまう「村八分」というペナルティは、わりと最近まで死活問題だったわけですね。

B 近代社会になってきて、貨幣（＝お金）というものが、より生活を媒介する手段として浸透していくと、極端な話お金さえあれば、生きるために必要なサービスはだいたい享受できるようなになりました。

C、今はコンビニなど二十四時間営業の店も増え、思い立った時にいつでも生活必需品は手に入れられるし、ネットショッピングとタクハイを使えば、部屋から一歩も出ずにあらゆるサービスを受けることも可能になっていきます。働くにしても、仕事の種類によってはメールとファックスで全部済んでしまう場合だってあります。

このように、一人で生きていても昔のように困ることはありません。生き方としては、「誰とも付き合わず、一人で生きる」ことも選択可能なのです。

ある意味で、(1)「人は一人では生きていけない」というこれまでの前提がもはや成り立たない状況は現実には生じているといえるのです。

さて、こうした現代的状況を目の前にして私が言いたいのは、「だから、一人でも生きていけるんだよ」ということではありません。みんなバラバラに自分の欲望のおもむくままに勝手に生きていきましたよといったことでもありません。「一人でも生きていくことができちゃう社会だから、人とつながることが昔より複雑で難しいのは当たり前だし、人とのつながりが本来の意味で大切になってきている」ということが言いたいのです。つながりの問題は、(2)こうした観点から考え直したほうがよさそうです。

今の私たちは、お金さえあれば一人でも生きていける社会に生きています。でも、普通の人間の直感として「そうは言っても、一人はさびしいな」という感覚がありますね。本当に世捨て人のような生活が理想だという人もいないわけではありませんが、たいてい、仮にどんなに孤独癖の強い人でも、まったくの一人ぼっちではさびしいと感じるものです。

ではなぜ一人ではさびしいのでしょうか。やはり親しい人、心から安心できる人と交流していたい、誰かとつながりを保ちたい。だからほとんどの人が友だちがほしいし、家庭の幸せを求めているわけです。

あの人と付き合うと便利だとか便利じゃないとか、得だとか損だとかいった、そういった利得の側面で人がつながっている面もたしかにあるけ

れども、しかし人と人とのつながりはそれだけではないわけですが。

D、「人は一人でも生きていけるか」という問いに対する私の答えは、「現代社会において基本的に人間は経済的条件と身体的条件がそろえば、一人で生きていくことも不可能ではない。しかし、大丈夫、一人で生きていけると思い込んでいても、人はどこかで必ず他の人々とのつながりを求めがちになるだろう」です。

誰でも、「人と親しくなりたい」、「人と人とのつながりの中で幸せを感じたい」と願うものです。本質的に人間は、つながりを求めるものなのです。

しかし、現代は、それを求めることによって、かえって傷ついたり、人を追い詰めたりするような状況に陥ることがあります。

どうしてそうなってしまうのでしょうか。

一つには、「親しさを求める作法」が、いまだに「ムラ社会」の時代の伝統的な考え方を引きずっているからなのだと私は考えています。

じつはご年配の方はもちろん、意外なことに若い人の中にも、その「古い作法」を引きずっている人は、ケッコウ多いのです。むしろ若い人のほうが、「古い作法」に強く純粋に従っている傾向があるかもしれません。

ある程度社会経験を重ねれば、のらりくらりとかわせることも、若い人は真正面から受け止めてしまいがちです。中学、高校などの部活動における先輩―後輩の関係の作り方などをみていると、そう感じることがあります。一歳か二歳しか違わないのに、かなり厳しい上下の関係を守っている場合がありますね。だから辛いし、ときとして爆発してしまうこともあるのではないのでしょうか。

私たちはある種の共同体的なつながりや関係の中で培ってきた、とりわけ日本人的な親しさの作法をお手本にし続けています。そこには確かに、損得を超えて人を全面的に包み込むような温かみや情愛の深さを受け継いでいる面もあるかもしれませんが。だから無下に否定してしまうわけにはいかないという側面が確かにあります。しかし、みんな同じような職業や生活形態を前提とするムラ的な共同体の作法では、もはや親しさを維持することはできないほど、私たちの置かれている状況は以前とはすっかり変わってしまったと考えた方がいい。ムラ的な伝統的作法では、家庭や学校や職場において、さまざまに多様で異質な生活形態や価値観をもった人びとが隣り合って暮らしているいまの時代に、★フィットしない面が、いろいろ出てきてしまっているのです。そろそろ、

(4) 性を前提とする共同

体の作法から、自覚的に脱却しなければならぬ時期だと思えます。この

ことは、これを読んでもくれる若い人たちにもあてはまるだろうし、何よりもいまの学校の先生や、親御さんにも、ぜひご理解をして頂きたい大事な側面だと私は考えています。

★基本的な発想として、共同体的な凝集された親しさという関係から離れて、もう少し人と人との距離感を丁寧に見つめ直したり、気の合わない人とも一緒にいる作法というものをきちんと考えたほうがよいと思うのです。人と人とのつながりについて、基本的な発想の転換を試みてみようと思うのです。

(菅野仁『友だち幻想 人と人の〈つながり〉を考える』)

★フィット…びったりあてはまる。

★凝集……ひろがっていたものが一つに集まること。

問一 — (1) 『人は一人では生きていけない』というこれまでの前提とありますが、それはどのような前提ですか。解答らんに二行以内で具体的に説明しなさい。

問二 — (2) 「こうした観点」とありますが、それはどのような観点ですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問三 — (3) 「かえって傷ついたり、人を追い詰めたりする」とありますが、それはなぜですか。解答らんに三行以内で説明しなさい。

問四 (4) に入れるのに最もふさわしい言葉を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 同質    イ 主体    ウ 公平    エ 利害

問五 次の一文を文章の中の☆の間(47行目～62行目)の適切な部分に戻し、直後の五字を答えなさい。(読点や記号も字数に数えること。)

そのことが、人間の幸せのひとつの大きな柱を作っているからです。

問六

A ㄱ D に入れるのにふさわしいものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

- ア とりわけ      イ だから  
ウ ところが      エ もちろん

問七

——(ア)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 年齢が上であればあるほど、暮らしている場所が都会であればあるほど、人は一人では生きていけない可能性が高い。  
イ 近代社会になり、貨幣が流通するなど様々な社会の変化により、昔ほど一人でも生きていくのに困らなくなった。  
ウ 若い人よりも年配の人のほうが、「親しさを求める作法」において、「ムラ社会」の時代の伝統的な考え方を引きずっている。  
エ 都市開発が進み近隣住民との交流が希薄になってきている現代だからこそ、昔ながらの人と人とのつながりのあり方に立ち返るべきである。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

瀬里奈はささいなことで泣く、極度に内気な少女であったが、私(律)が読み聞かせた『くるみ割り人形』のなかの「マリー」になりきることで性格や態度が大きく変わっていった。

その日の帰り道、私は瀬里奈に何気なく尋ねた。

「ね、瀬里奈は早野さんが嫌い?」

「別に?」

「じゃあ、何で話しかけられても、いつつもむすつとしてるの?」

「そんなつもり、ないけど」

「嫌いじゃないんだったら、ちよつと話してみたら?」

「なんで?」

「いろんな子と話してみるのも、いいと思って。私や久美ちゃんばかりと一緒にいるより、世界が広がるかもよ」

そう言うと、瀬里奈はシヨックをうけたようだった。

「律は私のこと嫌いな?」

「えっ、違うよ、そういう意味じゃないよ。ただ、瀬里奈がひよつとしたら、楽しいかも、つて思っただけ。早野さん、いい人そうだし」

早野さんはさっぱりとした性格で男子からも女子からも好かれていたので、瀬里奈とも気があうかもしれないと思った。それに、せつかく「出世」できそうなのだから、<sup>(1)</sup> 私たちの狭い世界の中にずっといては勿体ないよな気がした。クラスの中でこんな出世劇が起きるなんて、奇跡みたいなことなのだ。私はそれをこの目で見てみたいのかもしれないなかった。

「思っただけだから、気にしないでいいよ。嫌なら、無理しないで」

(2)

「うん、話す相手が増えるの、多分、瀬里奈にはいいと思う」

私は少し声を低くして、言った。

「ねえ、瀬里奈、今でも『くるみ割り人形』って、よく読んでるの?」

「うん、毎日、読んでるよ。そうでなければ、私がこんなふうにな、泣かないで毎日過ごせてるわけじゃない」

「それなんだけど……」

私は口ごもりながら、

25

20

15

10

5

「気のせいなんじゃないのかな。だいたい、瀬里奈がなりきってる『マリー』って、あの本のマリーとは全然違っちゃってるし……もう、その本を読まなくても、瀬里奈はそのままなんじゃないのかなあ」

瀬里奈はまったくとりあわないといった調子だった。

「そうかなあ……」

私はそれ以上何も言わなかった。

瀬里奈は、早野さんのグループと行動を共にすることが、だんだん増えていった。昼休みも、給食を食べ終えた瀬里奈に早野さんが「こっち、こっち」と手を振り、自分達のほうへと誘い出したし、帰りも、「瀬里奈、一緒に帰るでしょ? うち寄ってかない?」などと背中を叩き、自然と二人は一緒に帰っていった。

背の高い二人が一緒にいると、とても目を引いた。早野さんはきりつとしたいわゆる美人で、耳の見えるショートカットをいつもワックスで綺麗にまとめていた。<sup>★</sup> ティーン向けの雑誌の街頭スナップに載ったことも何度かあった。その早野さんが、

「うらやましいなあ、瀬里奈、顔ほんと小さいし、腰の位置があたしと全然違うじゃん。ちよつと、何頭身あるかはからせて。どうすればそうなるの?」

などと言うので、ぎすぎすに骨ばって不気味だと言われていた長い手足が、まるで皆の目指すところであるかのように思えてくるのは不思議だった。学校の中の価値観は、発言権のある子によって支配されてるんだなあ、などと、私は感心してその様子を眺めていた。あの、桜の降っていた四月のころとは、瀬里奈の立場は面白いように正反対になっていた。

「瀬里奈ちゃん、やつぱりあっちのグループが良かったんだね」

久美ちゃんが残念そうに言った。

運動会が終わり、冬の匂いが増える日が増えて、押入れの中からセーターを出したところには、私と瀬里奈はほとんど喋らなくなっていた。瀬里奈のいなくなった、私、麗ちゃん、久美ちゃんの三人組は、また元通り、<sup>(3)</sup> 高い女の子のグループになって、クラスのすみっこに溶け込んでいった。

高い値段のついた女の子がこれからどうなっていくのか、私には見当も付かなかった。麗ちゃんは、久美ちゃんがやたらに瀬里奈になつた一件

60

55

50

45

40

35

30

を根に持っていて、今度は私に、久美ちゃんには教ええない。(4)内緒の話を手打ちしたり、何かといえは手をつないでトイレに連れて行ったりするようになっていた。

トイレで髪の毛を整えながら、麗ちゃんは私に耳打ちした。

「久美ちゃんって、悪い子じゃないんだけど、ちょっと八方美人だよねえ。ね、バレンタインの計画のこと、久美ちゃんにはまだ内緒ね。だって、口が軽そうなんだもん」

麗ちゃんは、今からバレンタイン目指して、ダイエツトしながら、手作りチョココレートの練習をするんだと張り切っていた。

私は麗ちゃんの好きな男の子のクラスにわざわざ偵察に行つて、席替えで今度はこの席になったとか、同じ男の子が好きらしい女の子がクリスマスに何かしかけるつもりではないかさりげなく調べたりとか、麗ちゃんの指示に従つていろいろと行動しなくてはならなかった。

「ねえ、どのチョコがいいかな、アーモンド、好きかなあ。トリュフかなあ」

「別に、気持ちがかもつていれればいいんじゃない」

「えー、律ちゃん、真面目に考えてよね。もういいよ、協力してくれないなら、一人でやるから」

麗ちゃんはうっかりするとすぐにそうして機嫌を損ねてしまうので、私はなるべく麗ちゃんを刺激しないような言葉を選ばなくてはならなかった。人との会話はワークブックに似ている、と私は思った。相手の性格や状況などを考えてできるだけ素早くどんな返事が求められているか把握し、確かな返答を考え出すのだ。そう思うと、前ほど難しいことではないような気がした。私は淡々と、答えを埋めていった。

冬休みが終わり、五年生もだんだん終わりにさしかかるころには、私はその単調な作業に随分慣れていった。

バレンタインデーの日、私は麗ちゃんに連れられて彼女の好きな男の子のマンションの下で、彼が来るのをずっと待つていた。麗ちゃんは、いざとなると、

「やっぱり、無理！」

と言つて、私の手をつかんで逃げ出した。結局、私たちは麗ちゃんの手作りのトリュフをいっしょに食べながら帰った。麗ちゃんが言った。

「律ちゃんって、ほんとにいい子だよ。私、律ちゃんと友達でよかった」

90

85

80

75

70

65

「え、私が？」

(5)麗ちゃんにそう言われることが意外で聞き返すと、麗ちゃんは私の手を握りながら、

「うん。私、お友達の中で律ちゃんが一番好き。優しいし、嫌なこと絶対に言わないし、口も堅いし。これからも仲良くしてね」

と言つた。私は麗ちゃんの作った甘ったるいチョココレートを口の中で溶かしながら頷いた。

家に帰ると、母が玄関に出てきて言った。

「律、この前の塾のテスト、すごくよかったじゃない」

「そうかなあ」

「とくに社会は、苦手だったのに本当に偉かったわね。今日は、律の好きなもの、何でもつくつてあげるわよ」

「いいよ、お母さんも疲れてるんだから、たまには休みなよ。私、今日は宿題ないんだ。晩御飯、つくつてあげるね」

そう言つて部屋に靴を置き、台所に立つてお米をとき始めた私に、母がしんみりとした様子で言った。

「律は、本当にしつかりした、いい子に育つたわね」

「別に、そんなことないと思うけど。いいから、テレビでも見れば」

「ありがとうね、律」

冷蔵庫から野菜を出しながら、ふと母の方を見ると、  
(6) 頭を押さえていたようだった。

私は、自分がいつのまにか、ワークブックでとてもいい点数をとつていたことを知つた。それで、私はワークブックの最後のまとめテストで満点をとつたような、おかしな爽快感を得た。ごほうびに、何かしたいことをしてもいいんじゃないか、と私は思った。私は、窓の外の灰色の光景を眺めながら、遠くへ行きたいと思った。見覚えのない景色の中を、少しだけでいいから歩きたい。

(村田沙耶香『マウス』)

★『くるみ割り人形』…E・T・A・ホフマンの童話。

★ワックス……ヘア・ワックスのことで、毛髪を整える化粧品。

★ティーン……十代の若者。

120

115

110

105

100

95

問一 — (1)「私たち」とありますが、「私たち」の具体的な説明となつてい  
る語句を十六字で抜き出しなさい。

問二 (2)に入れるのにふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、  
記号で答えなさい。

ア「…嫌じゃないけど…やっぱり、早野さんと話すのは、なんか、き  
つい」

イ「…律がいうほど、私には、早野さんがいい人には見えないけど」

ウ「…久美ちゃんもそう言ってたけど…話してみようかな」

エ「…律がそう言うなら、少し、話してみるけど」

問三 — (3)「クラスのすみっこに溶け込んでいった。」とありますが、どう  
いうことですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問四 — (4)「内緒」とありますが、「内」を使った次の一～五の語句の意  
を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 内弁慶

二 内幕

三 手の内

四 松の内

五 身内

【意味】

ア 家の中ではいばつていますが、外に出るといくじがないこと。

イ 家族や親類。

ウ 一月一日から七日の間。

エ 心にかくしている考え。

オ 外からではわからない内部のようす。

問五 — (5)「麗ちゃんにそう言われることが意外で」とありますが、どう  
して意外だったのですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問六 (6)に入れるのにふさわしい漢字一字を自分で考えて書きなさい。

問七 — (7)「ワークブックでとてもいい点数をとっていた」とありますが、  
これはどういうことですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問八 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えな  
さい。

ア 瀬里奈は、一学期のうちは、律と仲良くしていたが、瀬里奈の読  
書をめぐる会話が原因で話をしなくなり、それを見かねた早野が  
瀬里奈に話しかけるようになって、そのグループの一員のように  
なった。

イ 瀬里奈は、学年の始まるころはクラスメイトからよく思われてい  
なかつたが、久美たちと仲良くなり、二学期が終わるころには、  
クラスの中心的存在である早野と親しくなり、久美たちとは距  
離が生じ始めた。

ウ 律は、相手のことを思つて言葉を選び行動をする少女であり、瀬  
里奈に対しても彼女の<sup>かたじけ</sup>のためにアドバイスをしたのだが、かえつて  
瀬里奈は麗たちに誤解され距離を置かれるようになった。

エ 律は、大人しい女の子たちと仲良しで、内気な性格である瀬里奈  
とも親しかったが、瀬里奈の容姿にあこがれる早野はそういう交  
友は瀬里奈に似合わないと思ひ、瀬里奈を自分たちのグループに  
入れようとした。

